

重点目標	重点	具体的取組	担当	現状(H30年度結果)	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	達成度(A+B)%	判定	年度後半の方針・方策
1. 授業改善と学力向上	◎	①基本的な学習規律の定着	学びの基礎づくり部会 河崎	児童の実態に合わせ、学習目標を設定していったことで、児童が集中し、学習に臨める環境を整えていくことができた。また、結果を可視化することで、児童もより良い結果を出せるように目標を意識することができた。次年度もまた児童の実態に合わせた取り組みを行い、学習規律の定着を目指していきたい。	学年に応じた学習規律が身に付いている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員③100% ・児童④97% ・保護者④78%	A	毎月、学習目標を掲示し、月末に点検を行った。担任からの声掛けもあり、意識して授業に取り組む児童が多かった。しかし、クラスによってばらつきもあったため、どのクラスでも意識して取り組めるように共通理解していきたい。取り組み結果を掲示し、可視化することで児童の意欲につながり、90%以上の児童が意識することができた。 2学期以降も児童の実態に合う学習目標を決め、学習規律の徹底を図りたい。
		②学習準備の定着(名札着用と筆記用具、道具袋に入れる物がそろっている)	学びの基礎づくり部会 河崎	毎月の学習用具の点検で自分の持ち物を確認し、筆箱の中身をそろえる児童が増えてきた。また、名札もほとんどの児童が着用できている。次年度も、児童が自分たちの持ち物を意識し、整理できるようにしていきたい。持ち物表を配布するとともに学習用具はシンプルなものを使用するという約束を共通理解していきたい。	名札着用と筆記用具、道具袋に入れる物の準備がされ、その指導をしている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員①100% ・児童②93% ・保護者②84%	A	毎月、学習用具の点検を行い、持ち物の過不足がある児童には担任から個別に声かけを行ったため、筆箱の中身が揃うようになってきている。また、学期初めに持ち物表を配布し、道具を揃えてから新学期を迎えられるように取り組んだ。しかし、シンプルな物やのりやペンなどの消耗品がなかなか揃わないところもあったため、引き続き持ち物の約束を確認した上で、持ち物表を配布したり児童への声掛けをしていきたい。
		③表現する力の育成(話すこと)	学びの基礎づくり部会 松本	「あたたかな聴き方」「やさしい話し方」「学びの約束5か条」を職員で共通理解して取り組むことができた。児童の学習意欲が高まり、特に低学年は授業での話し方や聴き方など学習基盤が整えられた。今後、自分の書いた考えと比べながら友達の考えを聴き、さらに付け足したり、書き直したりしたことを、説明することができるように、手立てをしていく。また、学びが広がったり深まったりしたことを児童に価値づけし、自信を持たせていく。	自分の考えを伝え、つなげて話すことができる	A:よくあてはまる(90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員④100% ・児童⑤80% ・保護者⑤77%	A	友達の話を「あたたかな聴き方」で聴いて、自分の考えがどう変わったかを、変身Vを意識して使い、話すことができるようになってきた。授業の振り返りでも、変身Vを感じるようになってきた。今でも自分自身の学びの成果を感じていなかった児童も、「わかった!できた!」なるほどを感じるようになってきた。今後、さらに話を聴くことで、自分の考えが深まったり広がったりしたことを、発表したり書いたりできるような児童を目指していきたい。
	◎	④家庭学習の充実と習慣化(低学年20分、中学年40分、高学年60分の定着)	学びの基礎づくり部会 谷口	かしこ山遊園地をつくったことによって、低学年・中学年の自主学習への取り組みが増加した。さらに、全校で頑張ってやっという意識を持たせることができた。また、自主学習の取り組みの学級差や学年差をなくすために、職員に自主学習ノートの評価の仕方についての指標を出した。課題として、宿題への取り組みはどの学年もとてもしっかり取り組んでいるが、自主学習ノートへの取り組みが高学年になると少なくなったり、個人差が大きかったりする。次年度は、家庭の協力を得ることも大切にしていきたい。	毎日、決められた時間の家庭学習を行っている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑤93% ・児童⑦87% ・保護者⑦77%	B	学習ノートが1冊終了した際に、かしこ山遊園地に自分の分身を張る取り組みを継続して行っている。今年度は、かしこ山遊園地をより豪華にし、児童の意欲が高まるようにしている。また、児童が予習を行うことができるよう、予習の手引きを低学年用と高学年用に分けて作成した。今後も、児童が意欲的に復習や予習に取り組むことができるよう取り組みをしていく。
	◎	⑤読書量目標値の到達促進の取り組み(児童委員会活動、教職員や司書による本の紹介、読書カード等)	学びの基礎づくり部会 谷口	2週間に1回本を借りる運動に加えて、月に1回は、帯タイムに本を借りに行くという取り組みをしたことにより、昨年度に比べ、読書量は増加した。また、読書山のぼりや図書ビンゴなどの読書イベントを職員全体で呼びかけたことで、本年度後半は昨年度よりも貸出冊数が増加した。読書量をさらに増加させるために、今後は、児童が読書イベントの有無にかかわらず、自発的に本に触れることができるよう、より身近に本を感じられる環境作りをしていきたい。	読書量の目標値を設定し、到達のための手立てが工夫されている	目標値 1~3年生 月10冊以上 4~6年生 月5冊以上 A:よくあてはまる(90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑥93% ・児童⑧80%	B	帯タイムを活用し、本を借りに行く取り組みを継続して行っている。図書館司書員や各学級担任と連携することで、児童は毎月1冊以上本を借りることができた。今後は児童がより読書に興味を持てるよう、図書委員会による読書イベントを開催したり、図書ボランティアの方たちと連携したりしていきたい。また、児童が学年に応じた本にも積極的に触れ合うことができるよう企画を工夫していきたい。
	◎	⑥補充学習の計画的な実施(朝読書、ぐんぐんタイム、個別学習の計画的な実施)	学びの基礎づくり部会 松本	道徳的価値を意識しながら行事作文を書くことで、道徳の授業で学んだことを自分事として実生活の中で考えることができてきた。全校テストに向けて自学に取り組むなど、合格に向けて意欲的に学習をしていた。3年生5年生はレベルアップドリルに計画を立てて取り組んだ。児童の意欲を持続させながら継続していきたい。	補充学習の計画的な実施をしている	A:よくあてはまる(90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑦100%	A	学力調査の結果を生かし、本校児童が苦手とする分野の授業改善を行っている。どの子にもわかる授業のしかけを考え、達成度の底上げを図る。全校テストの校内格差をなくし、基礎基本の問題は全員が合格できるように補充学習を行う。
		⑦学力向上プランを意識した授業づくり	学びの基礎づくり部会 松本	「聴いて、考えて、つなげる授業」の具体的な取組を職員で共通理解をして、学校全体で取り組んだ。今後、「あたたかな聴き方」と「やさしい話し方」を連動させ、友達の考えを聴いて、自分の考えに付け足したり、書き直したりして、自分の考えを説明できるように支援を行う。	学力向上プランの具体的な取組を行っているかの意識アンケートや検証、評価を積極的にやっている	A:よくあてはまる(90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑧100%	A	職員、児童ともに取り組みの意識は向上している。今後、発表する、ノートに書くなど目に見える児童の姿を検証する。目指す児童の姿を、低学年・中学年・高学年において発達段階に応じて設定する。そうすることで、目標がより具体的な姿となった。
		⑧3つの視点で行う授業改善	学びの基礎づくり部会 松本	3つの視点を意識した授業を行うことができるよう取り組んだ。特に、アタックポイントでは、友達の考えを聴いて、自分の考えと比べ、付け足したり、書き直したりして考えを広げ深めた。今後、自分の考えを説明することができるように支援をしていく。	学びボード、アタックポイント、深めの発問の3つの視点で授業改善をしている	A:よくあてはまる(90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑨100%	A	本校の授業スタイルを全職員が共通理解して共通実践することができている。今年度、友達の考えに繋がって話すことができるように、変身Vを提案した。全職員が授業に取り入れている。
	◎	⑨各種学力調査の結果を生かした学力向上改善の取り組み(4月:国、県学力調査12月:県、市学力調査)	教務 井上	県評価問題、市学力調査の結果は、年度当初の学校目標には届かなかったが、どの学年も市・県・全国と比較しても平均を大きく上回る結果であった。また、学年間での大きな差はなく、学校全体での学力向上の取組や授業改善の成果があったとらえている。前期の課題であった書くこと話すことについては、後期学力向上プランに位置付け、授業の中で先生方の意識を図るとともに、活用力をはかる問題・時の暗唱・条件作文などの基礎の部分でも力をつける取り組みをしてきた。来年度も基幹の取組として継続していく。	各種学力調査の結果を生かした学力向上の取り組みを積極的にしている	A:よくあてはまる(90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩84%	B	今年度の全国・県の学力テストも、県平均を上回り、学力向上の取組が成果を上げているといえる。しかし、どの教科も「説明する」問題に課題が見られる。毎日の授業で条件を整理してまとめ、分かりやすく説明する力をつけていく必要がある。単元末に学力テストの類似問題に取り組ませるよう、年間計画に明記したり、学期末に再度取り組ませる問題を学力テストから1問選び、80%以上の正答率を上げられるように取り組んでいく。

2. 豊かな心と社会性の育成	①あいさつなど基本的行動様式の育成	心・体力づくり部会 坂井	保護者のあいさつに対する割合が8割弱だったのは、家庭や地域でのあいさつがもう少しということだった。しかし、学校でのあいさつは教師や児童間でとてもよくなった。あいさつをする時に「自分から」「立ち止まって」「笑顔で」「語先後礼」ができる児童が多くなった。その中の「語先後礼」であるが、そこまではできなくても、軽く会釈をしてあいさつができるようになった。これも、毎月のあいさつ運動の効果が表れていると思われる。全校を通して、朝から明るくハイタッチをしながらのあいさつは、心を通わせるのにもよかった。あとは課題である地域でのあいさつに力を入れて取り組みを考えていきたい。	語先後礼のあいさつがきちんとできている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑪100% ・児童⑨91% ・保護者⑧74%	B	日頃の学級指導や、道徳・学活などに加え、児童会活動を通して、あいさつすることの大切さを実感し、主体的にあいさつできるように意識を高めていく。年間を通して、委員会や学級・ペア学年・小高連携など、様々な関わりの中で、あいさつ運動を継続し、日常でも抵抗なくあいさつできるように仕向ける。また、外部からの来校者や校外活動などの機会をとらえ、地域で出会った人にも自分たちから、気持ちのよいあいさつを積極的にできるように事前指導する。
	②いじめや問題行動対応の体制	生徒指導 坂井	保護者アンケートに対するABの割合が、年間を通して100%だった。日頃から、いじめに対するアンテナを高めて、職員間の情報交換を密にしてきた結果が出たと思われる。また、毎月の児童のなかよしアンケートでは、いじめに対する内容が昨年度と比べて激減した。そのアンケートの通り、児童の普段の様子を見ると、とても落ち着いて学校生活を過ごしているように見えた。しかし、この状態に満足せず、常に児童への見取りを厳しくし、少しの変化にも気づいて対応していけるように、職員間の連携を強めていきたい。	早期発見、解決への組織的対応をしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑫100% ⑨100% ・児童⑩96% ⑭96% ・保護者⑨99%	A	なかよしアンケートや保護者アンケート、面談、いじめ対策委員会による現状把握と、教職員間による日頃の見取りと共通理解を継続する。児童集団の育成とともに、いじめの疑いも見逃さないように、職員間での情報交換を密に行い、いじめを見逃さない学校づくりをめざしていく。また、保護者からの相談や気にかかっていることについて、早期に確認し対応にあたる。
	③主体的に取り組む特別活動	心・体力づくり部会 小山	年6回の「たてわりなかよし会」を実施することができた。6年生が下級生を引っ張り、優しく教えてあげる姿が見られた。その6年生の姿を見て、5年生が「6年生ありがと会」で中心となり、活躍することができた。毎日のたてわり班清掃でも、6年生が中心となり、無言清掃を1年間通して実施することができた。今後は、たてわり班活動における内容を充実させ、絆づくりができるようにする。	主体的によりよい学校生活を築こうとしている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑬100% ・児童⑪96%	A	これまで3回の縦割り班活動では、試行錯誤しながらも、6年生が最高学年として他学年を引っ張っていきとうとする姿が見られた。それが、縦割り班活動だけではなく、様々な行事や清掃などに繋がってきている。今後も引き続き高学年を中心として責任感と自覚をもたせていくように、さらに教師の出る場面を減らして主体性を高めていく。
	◎④道徳科の指導の充実	道徳推進 鞠山	2年間の指定研究の成果や道徳に関する研修からの学びを生かし、授業展開やつなぐ手段等を継続・改善しながら、授業力の向上と共通実践を行っていく。自己点検シートの活用と実践記録掲示を継続していく。	自己点検シートを活用した道徳授業を行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑮100%	A	重点項目について児童に意識化させるため、昨年に引き続き、行事作文にめあてと振り返りを書くようにする。昨年度の自己点検シートを学年ごとにまとめ、今年度の授業の参考にできるようにするとともに、自己点検シートの活用を継続していく。
	◎⑤全体計画別業と関連づけた道徳授業の工夫	道徳推進 鞠山	学校生活や日常生活など、児童が今までに経験したことを基に、道徳的価値について考えを深められるよう授業を実践していく。また、授業の中で考えた生き方づくりを、その後の活動を通し、実感できる機会を設定するように意識していく。	「いしかわ版道徳教材」や保護者や地域人材を活用した道徳授業の工夫をしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑯72%	C	行事の写真を掲示し、学校生活と価値項目との関連を児童が気づけるようにする。年4回ある授業参観のうち、1回は全校一斉で道徳の授業を公開する。そこでGTとして、地域人材を活用し、より充実した道徳教育を目指す。
	◎⑥個別の指導計画や教育支援計画の作成と有効活用	特別支援 コーディネーター 山原	個別の指導計画・支援計画を学期ごとに更新して支援・指導の見直しをしている。校内支援委員会で情報交換や共通理解を行い、専門相談や他機関との連携もできた。また、支援員の方と連携し、支援が必要な児童へよりよい支援ができるようになってきている。来年度に向けて、引継ぎを行い、よい支援が継続して行えるようにする。	個別の指導計画や教育支援計画を作成し、有効活用している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑰92%	A	校内特別支援委員会で情報交換し、共通理解したことで、複数の目で児童の変化を迅速にとらえ対応することができた。また、児童へのブラスの言葉かけも増え、児童の自己肯定感も高まった。専門機関と連携したことで保護者も含め、多面的に支援方法を考え、同じ方向性を持って支援にあたることができた。今後も、情報交換を密にするとともに、支援計画が有効活用できるよう、来年度に向けての引き継ぎを行うとともに、中学校、幼稚園、保育園との引き継ぎも行き、支援が継続して行われるように取り組んでいく。
3. 健やかな体と危機管理の育成	①基本的生活習慣の定着(早寝・早起・朝食の定着)	保健主事 脊戸	2学期に生活リズムの学級指導を行った結果、1月の生活カレンダーでは就寝時刻(低-21:30、高-22:00)を守った児童は、低学年が80.2%、高学年が76.0%だった。長期休暇の後には、生活リズムが崩れやすいため、来年度も2学期を重点的に、生活リズムの指導に取り組んでいきたい。	早寝、早起、朝食の習慣が身に付いている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑳100% ・児童⑱72% ・保護者⑳70%	C	5月の生活カレンダーでは、目標時間(低学年21:30、高学年22:00)が守られた児童は、低学年が70%(昨年75%)、高学年が65%(昨年67%)とどちらも下がっている。担任と連携して、早寝早起きの生活リズムを整える必要性を、指導していく。
	◎②体力・運動能力調査の実施・分析・取組	心・体力づくり部会 重政	年度後半の方針・方策にも述べたように、本年度の新体力テストでは、4～6年の男女全種目で県の平均を上回った。昨年度の課題であった長座体前屈についても改善された。来年度に向けて、河井小学校の体力アップの取組を継続していくことが大切である。そのためには、現在の河井小学校の児童の体力についての課題と各種取組の目的を全職員で把握し、共通実践をしていく必要がある。また、毎年同じ取組だと、児童の意欲向上に繋がらないため、新しい取組や方法も織り交ぜながら行っていく。	体力・運動能力調査による課題の取り組みを行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員㉑100%	A	新体力テストの結果から、6年生は男女ともすべての運動項目で県平均を上回ったが、4、5年生においては、長座体前屈、握力、50m走等で県平均を下回った。総合評価においてもA群は61.2%、B群が25.9%となっている。今後は、県平均を下回った項目の記録向上に向けて、体育担当者と連携を取りながら、体育の授業を中心に運動の機会を設定し、取り組んでいく。
	③いじめのない温かい人間関係づくり	心・体力づくり部会 坂井	年2回、QUアンケートを実施し分析をした。それをもとに児童理解会議を開き、全職員で気になる児童について共通理解を図った。また、1回目と2回目の比較をして、学級のまとまりの変化にも目を向けるようにした。そうすることで、みんなで全児童を見守る体制ができたことがよかった。気になることがあればすぐに情報交換して、早急に対応できたのもよかった。今後は、職員が校内で見つけた児童のよさを担任に伝え、担任から価値づけることにより、互いのよさを実感できるようにしていく。	いじめ調査、QUアンケートや個人面談の実施している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員㉒100% ・児童㉓95%	A	日頃の授業や活動で見つけた児童のよさを具体的に伝え、児童の自己肯定感を高めていく。また、児童会の取組「かがやく河井っ子」を継続し、学級内外の児童が見つけたよいところを互いに伝え合い、温かな関係づくりをめざす。

	◎	④通信機器利用の指導と実施	心・体力 づくり部会 坂井	教員の情報教育に対する意識は徐々に高まってきていると感じる。また、11月の「親子ネット講座」により、各家庭に情報モラルと共に、輪島市の決まり「夜9時までに通信機器を預ける」ということは啓発できた。しかし、その講座に来られなかった家庭には、資料の配布のみになってしまっている。そういった、講座に来られれば、保護者にも、お便りや懇談会等で地道に呼びかけていかなければ、情報社会の現代では、この項目は下がっていく一方だと考える。学校からフィルタリングや情報モラル教育について発信をし、各家庭で考えてもらう時間、機会を多くとっていく必要がある。	ネット端末5つの指導と約束が守られている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑫100% ・児童⑩80% ・保護⑪70%	B	通信機器の所持率が高まっている現在、「持っているなら、正しく使う」「どう管理するか」を指導する必要がある。そこで、今年度は1学期に全校児童と保護者を対象に、非行被害防止講座「ネットゲームに潜む危険」を開催した。その他、学校だよりに通信機器利用に関する注意喚起を行っている。今後は、学年に応じた内容で学級指導を行ったり、学級懇談会で問題提起し、共通した約束事などを話し合ったりすることも必要である。
		⑤事故の未然防止と発生時における職員相互連携による迅速な対応	心・体力 づくり部会 坂井	登下校の安全指導をし、児童の安全についての指導を日頃から継続して行ったのがよかった。交通安全に関する気になることはすぐに担任に報告し、保護者へ連絡をしてもらおうにした。中でも危ないと感じたことは、視界がよくないところから道路への飛び出して、左右の確認をしないで道路を横断する児童が目についた。児童へ安全への声掛けを多くして事故の未然防止に努めていきたい。また、職員間で事故の未然防止の共通理解を図る機会を設けるようにしていきたい。	安全指導の実施と事故発生時の職員相互連携による迅速な対応を行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑬100% ・児童⑪98% ・保護者⑫98%	A	日頃から、登下校に関する安全指導を行っている。不審者や天候による危険性などについては、迅速に対応し、保護者への通知と児童への注意喚起を行っている。下校時に寄り道をする児童や公園などで危険な行為をしているなど通報があった際には、複数の職員が出向き指導をするともに、保護者にも連絡した。また、各学級でルールの再確認をするなど学校全体で共通の指導を行っている。
4.	◎	教育指導力と組織力の向上	学びの基礎 づくり部会 松本	聴いて、考えて、つなげる授業を全職員で共通して取り組むことで、児童の授業態度の基盤が整い、学習への意欲が上がった。職員全員が研究授業を行い、さらなる授業力の向上に努めた。今後、児童がよく聴き自分の考えが広がったことをメタ認知して自信がもてるようにに手立てをしていきたい。	研究主題の実現に向けて共通実践を積極的にしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑭90%	A	前期は話を「聴く」ことに重点を置き、全職員で共通理解して取り組んだ。アンケート調査の結果、前期では87%の児童が「あたたかな聴き方」を意識することができていた。今後、児童が友達の話聴いて「なるほど!」「どうして?」を見つづられるようにしていきたい。
		②校内研修の充実(外部指導者招聘、校内研究会の活性化、外部研修への積極的参加と還元等)	学びの基礎 づくり部会 松本	聴いて、考えて、つなげる道徳授業を共通実践し、児童が自分の考えを広げたり深めたりできたこと教師が価値を認めることで、児童は学び方を身に付け、学習への意欲が高まっていた。いしかわ道徳教育推進事業の研究会発表ではたくさんの方から、河井小の道徳の授業づくりが評価された。今後も道徳の授業で児童の考えが広がる実践を行っている。	校内研修を通して、授業力向上に取り組んでいる	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑮100%	A	情報教育研究大会が本校で行われることが決まっており、校内のICT環境の向上を目指して、外部講師を招き、職員を対象としたタブレットや無線LANの基本的な使い方の講習が行われた。また、指導主事講演訪問では、ICTを用いた体育科と総合的な学習の時間の授業について検討を行った。今後、さらにICTを用いた授業の活用を検討していく。
		③校務分掌や担当の責任の遂行	教務 井上	各担当が前年度の反省を生かして、部会や学年部での話し合いをもとに改善したり、新しい視点で見直したりしながら取組を進めることができていた。来年度も引き続き、このよ流れを踏襲し、チームワークを生かして組織的に取り組んでいけるようにしていく。	学校参画意識と組織の活性化に向けた取組を積極的にしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑯100%	A	新しいメンバーや若手教員にも、周りの協力体制のもとに担当を分掌して組織的に取り組んでいる。また、各取組の実践後には必ずふりかえりをし、来年度への申し送りとして共通理解をしている。これからも昨年度の反省点を生かすと共に、新しい視点で活動を見直すよう心がけ、後期の取組を進めている。
		④時間外勤務時間の縮減の工夫	教頭 宮本	ここ2か月は、時間外勤務12月が47時間、1月が45時間と、過労死ラインである80時間を大きく下回っている。時間外縮減の意識や仕事の段取りの工夫など、先生方一人ひとりが意識して取り組んできた結果であると考える。忙しくなる年度末年度初めは、早めの取り組みにより、継続して勤務時間削減に取り組んでもらいたい。	時間外勤務縮減の取組を積極的にしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑰78%	C	昨年より働き方改革の一環で時間外勤務の縮減に取り組んできた。4月は、前年比-16時間、5月・6月は、-19時間と意識改革は進んでいる。しかし個別に見ると時間外が多い教諭もある。仕事量が減らない中での縮減は難しいが、勤務の効率化を工夫し、更なる縮減を図りたい。
5.		開かれた学校づくりの推進と連携	教頭 宮本	第2回目も保護者評価・職員評価も高評価であった。学校としては、HP担当がタイムリーに記事を更新できている。日々閲覧数が伸びるのは、毎日の給食や行事記事など継続した更新がなされているからである。また、見やすい、興味をもちやすい学校だよりの発行を心がけており高評価を頂いている。学年・学級だよりでは、各学年・担任が工夫して学年・学級の状況を伝えている。それらの結果がこの評価に繋がっていると考える。保護者・地域開かれた学校の観点からも、更なる情報発信に努めたい。	学校・学年・学級だより、学校ホームページ等を通して学校情報を発信している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑱100% ・保護者⑲96%	A	保護者評価・職員評価も高評価であった。学校としては、HPの更新、学校だよりの発行などに力を入れており、HP閲覧数も大幅に伸びている。各学年・学級だよりでは、担任・学年で多少の差異はあるが、学級の状況を努力して伝えている。それらの結果がこの評価に繋がっていると考える。保護者・地域開かれた学校の観点からも、更なる情報発信に努めたい。
		②PTAや公民館活動など家庭と地域の連携	教務 井上	10月のバザーでは多くの地域・家庭が足を運び、子どもたちがミニゲームでも楽しむ新しい形での実施で成功を収めた。地域のゲストティーチャーによる学習活動や卒業制作も計画的に進めることができた。職員の評価が100%なのに比べて保護者の評価が低いことについては、双方向の取組になっていないことが原因かと思われる。前例踏襲にとらわれない取組やホームページや広報、学校だよりなどの情報の充実などをはかりながら、連携の活性化に努めていきたい。	地域人材をいかにした活動をしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑳79% ・保護者㉑77%	C	肯定評価がやや低いのは、1学期に地域人材を生かした活動がない学年があったためだろう。例年多くの地域人材に活躍していただいているが、今年度は、「合唱の集い」に向けて、地元音楽家、仲谷響子さんに5年生の歌声づくりの指導に来ていただいている。4年生の児童賞問紙でも、地域の方や専門家が来てくれる学習が好きだと答える児童の割合が高く、さらに地域との連携ができることよい。10月5日(土)にPTA主催の「河井 waiwai大作戦」が提案された。PTA各委員会が連携し、バザーと子どもたちを楽しませるイベントを行う準備が進められている。
	◎	③幼保小及び小中連携の推進(情報交換による相互理解、園児・児童・生徒の交流活動の実施)	教頭 宮本	来年度も幼・保・小、小・中・高連携を意図的に組み込み連携を深めていきたいと考えている。幼・保・小の連携では、毎月のお便り交換・掲示によりお互いの情報を知ることができる。小学校行事への園長・所長さんの臨席を頼ったり、年長児との交流を図っている。児童の情報交換も行き、常に意思疎通できる状態を継続していく。中高との連携では、輪島中学校との授業相互参観、整理会の参加、主任との情報交換会を継続して行い、また、輪島高校との合同あいさつ運動、高校教員の授業参観要請など、中高との連携を深めていきたいと考える。	幼保・中学校との情報交換会、交流活動、行動連携を積極的にしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員㉒85%	B	幼稚園・保育園だよりや、中学校の学校便りを掲示し、連携やつながりの見える化を継続していく。また、学校行事には、関係者を招待し、連携を深めてきた。幼保小連携に関しては、11月に学校コンサートを近隣の幼児の年長児を招いて実施する。また、3月には入学生予定者の体験入学を行い、交流活動を深めていく。小中連携に関しては、小中連絡会や計画訪問での相互参観を実施し、情報交換をした上で子どもと違ふよりよい姿を求めて共通行動を揃えたり、方策を考えたりする。また、中学校の入学説明会にも参加し、授業体験をしたり、説明を聞いたりしながら、交流活動を深めていく。